



美熟母と僕

禁断の熟肌

芳川葵

挿絵／黒石りんご

立ち読み版



第一章	ママのビキニが眩しくて……………	4
第二章	知られた秘密と人妻の蜜壺……………	53
第三章	人妻の姦計と熟母の誘い……………	102
第四章	人妻の事情と熟母の決意……………	159
第五章	ママと二人 秘密の夫婦旅行……………	225

登場人物

Characters

笹岡 幸希

(ささおか こうき)

十七歳の高校生。真面目な性格だが、欲望が強くなりすぎると衝動性が増すことも。

笹岡 万里子

(ささおか まりこ)

幸希の母親。母性的で豊かな身体つきの三十七歳。シングルマザーとして苦労した経験があり、しっかり者。

月島 静乃

(つきしま しずの)

万里子と同じスポーツクラブに通う三十歳の人妻。ざっくばらんで親しみやすい性格。抜群のプロポーションの持ち主。

(でもいまは僕、ママのことが……。僕が本当にエッチしたい相手は、静乃さんではなくママ。またママのあの気持ちのいいオマ○コに、挿れたい！)

「ほら、なにをしているの。早く来て、幸希くん」

幸希が逡巡していると、焦れたように静乃が腰を左右に振ってきた。その仕草はドキリとするほどに艶っぽく、いきり立つペニスが胴震いを起こす。

「あつ、あの、静乃さん、僕……」

「分かってるわ。本当は万里子さんとしたいのよね。でも、ママとまたそんなことをするのが難しいことも知っている。だから辛いよね。癒してあげるから、いらっしやい。それとも私じゃイヤ？」

振り向き、いつも以上に艶めいた表情を見せた静乃は、右手の人差し指と中指を股間部に這わせ、黒みの強まった股布をすつと撫でつけて見せた。

その瞬間、人妻の眉間に悶え皺が寄り、朱唇からは「あんッ」と艶めいたうめきがかぼれ落ちた。さらには、ヂュツと小さな蜜音が起こり、淫唇に這わせた指先が湿り気を帯びたのが分かる。

(静乃さん、僕のママに対する気持ちも全部承知で、その上で、僕のことを受け入れてくれようと……)

万里子に対する行為への自己嫌悪と、再びセックスを欲する相反する欲望。そのせめぎ合いに荒みそうな心に、静乃の悩ましくも優しい言葉が癒しを与えてくれた。

「そ、そんな、静乃さんのことは僕、前から……」

「うふっ、知ってたわ。幸希くんが私のこと、ウットリとエッチな目で見てたこと」「えっ!」

（バレてたんだ。僕が静乃さんの身体を、エッチな目で見てたこと、完全にバレバレだったなんて……）

控えめに見ていたつもりだったのだが、大人の女の目は誤魔化せなかったようだ。その事実には、羞恥が募ってくる。だがそれとは別に、昂る性欲が水着の中に隠された人妻の秘唇を思い、ペニスを断続的に跳ねあがらせてしまう。

「私を卒業して、ママにいつちゃったんでしょうけど、いまだけは私に戻っていらっしやい。ここがこんなにいやらしく濡れたのは、幸希くんのせいなんだから、男らしく責任を取ってみせて」

「ああ、静乃さん……」

（静乃さん、僕の負担を軽くしてくれようとしていているんだ。だったら僕も……）

柳眉を歪め、淫靡な瞳で見つめてくる静乃の、艶めかしさの中にも、いたわ勞りが感じ取れ

る言葉に、幸希は心が軽くなる感じがした。

両足首に絡まっていたサーフパンツから右足だけを抜くと、左足首だけに海パンを絡めた状態で、人妻の真後ろへと歩を進めていく。

（静乃さんと本当に……。でもまさか、スポーツクラブでエッチするなんて……）

スポーツクラブの屋内プール横にある用具室。コンクリートの壁の向こう側では、いまもたくさんの人が泳ぎを楽しんでいる。かすかに聞こえる喧噪が、幸希の耳にもはつきりと届いていた。それが、背徳感を煽ってくる。

「水着をめくって、私のあそこがどうなっているか、確かめてみて」

「は、はい。ゴクッ」

適度なボリリューム感のあるヒップ。突き出された、プリッと上向きの双臀の股間部分。乾きつつある水着の中で唯一、色が変わるほど湿り気を帯びている箇所、幸希は右手をのばしていった。

「伸縮性があるから、多少強引にめくっちゃっても大丈夫よ」

促す人妻の顔にも、さすがにかすかな羞恥が覗いているのが分かる。知り合いの息子に濡れた秘唇を晒すことになるとは、想像もしていなかったに違いない。

「分かりました」

かすれた声で返事をし、幸希は合成繊維でできたフィットネス用水着の股布に指を引っかけた。指先が静乃の脚の付け根に触れる。そこはハツとするほどに熱を帯びていた。刹那、幸希と静乃、二人の身体が同時に震えた。

「あんっ」

「め、めくり、ます」

「ええ、どうぞ」

短い言葉にも緊張が滲む。

艶やかに色づいた静乃の顔にも、いつそうの羞恥が浮かんだように思える。

一度小さく息をついてから、ピッチリと人妻の秘唇に貼りつく黒い水着の股布を、左から右側にグイッと寄せていった。ンチュツ、粘ついた蜜音が起こり、指先にかすかなヌメリを覚える。

「ああ、すっごい。これが、静乃さんのオ、オマ○コ……。お漏らししたみたい、グシヨグシヨになつてる」

（静乃さんのあそこ、ママのよりもずっとエッチだ）

万里子の秘唇をはつきりと見たのは、その腔内に大量の白濁液を放ったあとであった。赤く腫れたようになっていた淫裂。精液を逆流させつつも、美母の秘裂にはひっ

そり感があつた。

しかし、いま開帳されている静乃の秘唇は、女の色気がムンツと立ち昇っているように感じるのだ。事実、鼻腔をくすぐる牝臭も万里子に比べてずっと濃い。

薄褐色の淫裂は肉厚で、溢れ出た淫蜜でたっぷり濡れていた。はみ出し気味の小陰唇が淫猥さを醸し出し、ヒクヒクと小さく蠢くさまは、卑猥そのものである。

「はぁん、恥ずかしいから、そんなはつきりと言わないで。でも、そうよ。幸希くんとママの話を聞いて、さらには硬くて大きなオチンチン、お口に入れてあげたときから、私のあそこ、恥ずかしいくらいに濡れちゃってるの。だから、ねッ。遅しい幸希くんので、ちゃんと栓をして」

「し、静乃さん……」

恥じらいを見せながらも、匂い立つ色気を放つ人妻に、幸希の腰骨がブルツと震えた。ペニスが大きく跳ねあがり、鈴口からはネットリとした先走りが滲み出していく。「ほら、いらっしやい。ママのこと、忘れさせてあげるから」

静乃は右手を積み重なったプールフロアにつき、左手を股間から突き出してきた。

右手で水着の股布をめくりあげた状態のまま、幸希は左手でペニスを握り、下腹部に貼りつきそうな強張りを押しさげると、差し出された人妻の左手に委ねた。直後、

ほっそりとした静乃の指が、熱く漲る肉竿をやんわりと握りこんだ。

「ンはっ、くっ、はぁ、静乃、さん……」

なめらかな女性の指で強張りを握られた瞬間、絶頂の余韻をいまだに引きずっていたペニスが胴震いを起こした。脳天に愉悅の震えが突き抜け、眼窩には悦楽の火花が小さく瞬く。

「あぁん、一度出しているとは思えないほど、熱くて硬いわ。いい、水着、ズラしたままにしておいてね。もうすぐ、私の膣中で楽にしてあげるから」

「は、はいいい」

迫りあがる射精感を耐えるように、幸希は奥歯を噛み締め、頷いた。右手で水着の股布を端に寄せたまま、硬直を委ね自由になった左手を、静乃の括れた腰にあてがっていく。スベスベとしたフィットネス水着を通して、人妻の温もりが伝わってくる。

その間にも、静乃は肉竿を握った左手を手前に引き寄せていた。その引きに合わせ、少しずつ腰を突き出していく。

ンチュツ、龟头先端が濡れた秘唇と触れた瞬間、小さく粘音が起こった。

「んはッ！ 静乃さんのあそこに僕のが、くうう、これだけでも出ちゃいそうですう」

「うんッ、もうちよつとの辛抱よ。そうすれば、私の膣中に……」

左手に握った肉竿を小さく上下に動かしつつづけていた静乃が、悩ましくかすれた声で囁きかけてくる。

「くうう、はッ、はヒい」

張り詰めた亀頭が濡れた淫裂にこすりあげられるたびに、鋭い快感が背筋を駆けあがった。眼窩に瞬く悦楽の火花で視界が一瞬、白くなりかける。突きあげる射精欲求を、肛門を引き締めることによつてやりすごした幸希は、より強く奥菌を噛み締めた。「ああん、幸希くんの先つぼが、ピクピクしているのが分かる。もうすぐよ、ほんとにッ、はンッ、ここよ、ここが私の入口。いいわよ、腰を突き出してきてちょうだい」ンヂュッ、亀頭先端が少しだけ沈みこむ。直後、静乃の手がその動きをピタリと止めた。

「はいッ、じゃあ、あの、くッ、いきます」

女肉のヌメリと温もりに腰骨が蕩けそうになりながら、幸希は人妻の腰を掴む左手に力をこめ、グイッとペニスを突き出した。

グヂュッ、くぐもつた音を伴い、いきり立った強張りが肉洞に埋まりこんでいく。

「はあん、来てる。幸希くんの硬いのが、私の膣中に、ううん……」

「入ってる。僕のが、静乃さんのオマ○コに、くうう、呑みこまれていくよう。んは

っ、ぐッ、なに、これ？ チンチンの裏側がザラザラしたのでこすられてるう……」
水着の股布をめぐっていた右手も静乃の腰に這わせ、両手でガッチリと細腰を掴んだ幸希は、根本まで硬直を突きこんだ瞬間、目も眩むような悦楽に全身を焼かれた。
静乃の蜜壺は、万里子の肉洞と比べれば、締めつけは決して強くはなく、沈みこむペニスに適度な圧迫を加えてきている。褻の具合も、美熟母の四方八方から絡みついてくる感じに比べればおとなしめだ。

しかし、後背位で繋がる体勢だとペニスの裏側、亀頭裏の窪みから裏筋全体に感じるザラつき具合は、万里子の蜜壺では得ることのなかった感覚であった。

「動いて。腰を前後に好きなように振って、私の腔中、楽しんで」

それまで被っていたスイミングキャップを、静乃が右手で脱ぎ捨てた。キャップの中にお団子状に纏まっていた亜麻色ストレートのロングヘアがファサツと流れるように背中中に垂れ落ちてくる。

「はい、静乃さん。くうう、では、動き、ますッ」

肩胛骨あたりまでである、サラサラの亜麻髪を見つめながら、幸希はゆっくりと腰を前後に振りはじめた。

グチュッ、ブヂュッ、強張りが肉洞内を往復することに粘ついた淫音が起こり、腔

の上部内壁にあるザラザラした突起で、亀頭裏から肉竿の裏筋が刺激を受ける。

「んはう、ああ、静乃、さんッ、ううう、すつごく、気持ちいいです。このザラザラしたので、こすられているだけで、僕、あつという間に……」

「いいわよ、出して。思いきり腰を振って、そのあとは、好きなどきに出していいから、それまでは、うんッ、頑張つて」

「はい。ああ、静乃さん、しず、乃、さあん……」

ずちよつ、グチュッ、ずちやつ、人妻の腰を両手でガッチリと掴みこんだ幸希は、脳天に突き抜ける、痺れるような愉悅に翻弄されつつ、適度な締めつけの蜜壺に向かってペニスを繰り返して出した。

（静乃さんのオマ○コ、ママほど強く締めつけてこないし、ヒダヒダで絞りあげられる感じもしないけど、この裏側に感じるザラザラが強烈すぎて、ほんと、すぐにでも出ちやいそいだ。でも、静乃さんにも、少しでも気持ちよくなってもらわないと）

最愛の母の蜜壺との違いを感じ取りながら、迫りあがる射精感を必死にやりすごし、幸希は憧れだった人妻の柔褻を抉りこんでいくのであった。

（はあん、すつごい。幸希くんの硬いので膣中、こすりあげられるのが、こんなに気

持ちいいだなんて……。やっぱり、この硬さと熱さよね)

ぐちよつ、ズデュツ、ンデュツ、男子高校生のペニスが入り出すごとに、静乃の快楽中枢が激しく揺らされていた。テクニクもなにもない、単調な前後動なのだが、その逞しい若茎の漲り具合が、おぎなりのセックスに甘んじていた人妻の肉褻に、おんなとしての悦びを思い出させずにはおかなかった。

「はぁん、上手よ、幸希くん。その調子で、もっといっぱい、突きこんできて」

「はい、がッ、頑張ります。——くッ、ううう、はぁ……」

深く括れた細腰を掴む両手に、さらなる力が加えられたのが分かる。水着越しにも、少年の手が熱を帯びているのがはつきりと感じ取れた。

(うふっ、なんて素直な反応をしてくれるのかしら。でも、このままじゃ、本当にすぐにでも出ちやいそうね。あぁん、こんなに硬いの久しぶりなのに、万里子さんと一度しただけじゃ、経験ないのも同然だし、仕方ないかもしれないけど……)

荒い呼吸が耳の後ろに降りかかってくる。

グチュツ、ずちゅつ、淫洞に出し入れされるペニスが、ビク、ビクツと小刻みに震えているのが、柔褻を通して伝わってきた。それなりに経験を積んでいる静乃には、幸希の限界が迫っており、射精の瞬間が近そうであることも感じ取れていた。

それは少年の初心^{うぶ}さを伝える振動であると同時に、満たされぬ性感がまたしても充足することなく終わるかもしれない焦燥を駆り立てるものでもあった。

「ねえ、幸希くん、腰、動かしながら、両手で私の身体、はんッ、好きなようにますぐってちょうだい。オッパイ、お尻、太腿、ああん、クリトリスでもいいわ。オチンチンだけではなく、幸希くんの全身で、私を感じて」

「はいい」

愉悦に耐えるような押し殺した声で返事をした幸希の両手が、細腰から離された。プールフロアに両手をつき、ヒップを後方に突き出している人妻の背中上半身を密着させてくる。双臀に腰がぶつかり、熱く硬い強張りが、肉洞の奥にまで埋まりこむ。同時に、少年の熱い肌が、U字型に開いた水着から露出している背肌と重なり合い、ゾクリと背筋が震えてしまった。

(ああん、幸希くん、まずはオッパイを触ろうというのね)

肉洞内で小さく震えるペニスに膣壁をくすぐられ、眉間に悩ましい悶え皺を刻みながら、静乃は少年の次の行動を予測していた。

その予想通り、幸希の両手が黒いフィットネス水着に包まれた乳房に這わされた。ピッチリと肌に貼りついた合成繊維越しに、控えめに膨らみが揉みこまれる。直後、

淫洞内の強張りがビクンツと跳ねあがり、締めつけようとする膣壁を押しやってきた。「うんツ、オッパイ触ってて言っておいてなんだけど、フィットネス水着越しだと、あまりオッパイの感触、分からないでしょう」

スベスベとした手触りの合成繊維で覆われた双乳は、適度な盛りあがりを見せてはいるが、水の抵抗が考慮され膨らみが抑えつけられている部分もある。触り心地も、レジャー用の水着とは比較にならないほどに味気ない。それを知っているだけに、乳肉を小さく捏ねてくる少年に、申し訳ない気持ちがあがってきたのだ。

「大丈夫です。静乃さんのオッパイの柔らかさが、くツ、ちゃんと伝わってきました。それに、オッパイに触っていると、静乃さんのオマ○コの中もヒクヒクして、ンくう、僕のを締めつけてくれるから、すつごく気持ちいいです」

「なら、いいけど。ほんと私は私、オッパイ、大きいのよ。もちろん万里子さんほどじゃないけど、それでもEカップあるんだから」

「い、E、カップ……ゴクツ」

「あんツ、すつごい。オチンチン、まだ大きくなるなんて。ねえ、オッパイは味気ないかもしれないから、太腿とクリトリスに触って。そうすれば私も、幸希くんと一緒にイケるかもしれないから」

膣内でさらなる膨張を遂げたペニスに、驚きと快感を覚えながら、静乃は双乳でない場所への愛撫を求め、悦楽で潤む瞳で振り返った。

「はっ、はい」

経験のなさがそうさせるのか、またしても素直に領いてくれた幸希の両手が乳房から離れ、体側に沿うようにすべりおりてきた。熱い手の平が、ムチツとした太腿に這わされ、腿肌を堪能するように撫でつけてくる。その瞬間、ペニスがまたしても肉洞内で跳ねあがり、膣襞を押しやってきた。

「はうん、オチンチン、元気に跳ねあがってるう。腰も振って、オチンチン、もっと気持ちよくなってるいいのよ」

「は、はい。でも、くうう、腰、動かしたら、また襞のザラザラで裏側こすられて、すぐに、出ちやいそうだから、はあ、静乃さんの太腿、スベスベで気持ちいい」

「うふっ、好きにしているのよ。でもね、こっちもちゃんとしてくれないと、責任取ってくれたことにはならないぞ」

スレていない少年の正直さに母性をくすぐられつつ、静乃は腰をクイ、クイツと左右に小さく振っていく。意識して蜜壺を締めつけ、幸希を追い詰めてやる。

「ぐはッ、くうう、締まる。静乃さんのオマ○コが、グイグイと僕のに……。はあ、

静乃さん、しず、乃、きんッ」

快感に震える声をあげた少年が、再びゆつくりと腰を動かしてきた。

「グチュッ、グチュッ、小さくペニスが出し入れされ、柔褌が前後にこすりあげられる。はんッ、ああ、そうよ、幸希くん。頑張つて」

強烈さはないが、確実に迫りあがってくる快感に、甘い喘ぎがこぼれ落ちた。

「静乃さん、ああ、静乃さん……」

小さく腰を律動させつつ、幸希の左手が、水着が右端に寄せられたことよって完全に露出しているヒップにのばされた。プリッとした尻肉から裏腿にかけてを撫でつけてくる。さらに、右手が水着の股布へと移動してきた。

半分露出している楕円形の陰毛を撫でつけた指先が、強張りを啜えこむ淫唇の合わせ目に這わされる。直後、充血し包皮から顔を覗かせていた淫突起に、少年の右手中指の腹が接触した。

「あんッ！ はあ、ううん、そう、そうよ、幸希くん。クリをクニクニしながら、オチンチンでいっぱい、ズポズポしてえ」

脳天に突き抜けた鋭い淫悦に、静乃の眼前が一瞬、白く塗り替えられた。淫唇がキゅんッと震え、膣褌がペニスを締めあげてしまう。

「ンカあつ、あう、あつ、ああ、また締まってるよう、はあ、そんなにキュンキュンされたら、僕、ほんとに、出ちやいそうです」

「いいわ、出して。幸希くんの白いの、膣中にいっぱい出していいから、だから最後に、はんツ、思いきりズンズンしてえ」

「おおお、静乃さんッ！」

グチュツ、ずちゅつ、ヂュチュツ、小刻みに前後する幸希の腰の動きが速まった。

硬い肉鏝^{やり}で柔襲をこそげられるたびに、痺れる愉悦が背筋を駆けあがり、優しく転がされる淫突起からの鋭い淫悦と相まって、静乃の絶頂感を押しあげてくる。

「はうんツ、ああ、ううん、いいわ、その調子よ、幸希、くんツ。あうん……」

ズチャツ、くちゅつ、ニュヂュツ、粘ついた摩擦音とともに、パンツ、パンツ、と少年の腰が小気味よくヒップにぶつかり、尻肉が震える乾音が大きくなっていく。

「くうう、ダメだ、静乃さん、ごめんなさい、僕、ほんとにもう、出ちやううう」

「うんツ、いいのよ、きて。幸希くんの濃いミルク、私にいっぱい、注ぎこんでえ」
「ンおおお、出るッ！ 僕、もう、くツ、出ッりゆうううううッ！」

幸希の腰が一際力強く叩きこまれた。子宮が前方に押しやられる衝撃が襲い、直後、張り詰めていた亀頭が弾け飛んだ。



コン、コン。

控えめながら、部屋のドアがノックされたのだ。

(えっ! なっ、なに!?)

「幸ちゃん、ママだけど、まだ起きているかしら?」

ベッドから転がり落ちそうな驚きに見舞われた幸希の耳に、万里子の囁くような声が聞こえてきた。

(なんでママがこんな時間に……)

「う、うん、起きているけど、どうしたの、ママ」

心臓の鼓動が信じられないほど速まっていた。それでも最愛の母が声をかけてくれているだけに、無視することもできず、慌てて上体を起こし、裏返りそうな声でなんとか返事をする。

「ごめんなさいね、こんな夜中に。ちよつと開けるわよ」

「えっ!? ちよつ、ちよつと、待って」

下半身裸でペニスに母の薄布を巻きつけている自身の姿に思い至り、少し時間をもたせながら声を出したときにはすでに遅かった。カチャツ、と小さな音を伴って、部屋の扉が開けられていたのだ。

直後、「ヒッ!」と万里子の喉から奇音が漏れた。部屋の入口で固まった母は、両手で口元を覆い、見開いた瞳でジッとこちらを見つめてきている。

「マッ、マ……」

「ご、ごめんなさい、幸ちゃん。でも、あなた、それって私の、ママの、下着……」
かすれた声をあげた幸希に、息子がなにをしていたかを理解した万里子が、やはりかすれた声で謝罪を口にした。しかし、幸希のペニスを包んでいる物の正体にも気づいた母は、どこか怯えたような震えた声で問いかけてもきた。

（しまった! チンチン出しているだけならまだしも、ママのパンティでくるんでいたのは、言い訳のしようがないよ）

「あっ! あの、その……ごめん、なさい」

突然の母の登場に、盛りあがっていた射精感は一気に萎^{しぼ}み、ペニスもいまやダランと頭をさげている。だが、グリーンンの薄布だけはいまだ淫茎に被さり、万里子の視線からペニスを隠す役割を担っている。それに気づいて慌ててパンティを淫茎からどかし、左手でペニスを覆った。

「ふう……。ちよつと、お邪魔するわね」

天井を仰ぐようにして、大きく息をついた母が、改めてそう言うと、ゆつくりとべ

ッドに近づいてきた。シングルベッドの縁に浅く腰をおろすと、自身の左隣をポンポ
ンッと叩き、そこに座るよう促してくる。

羞恥に全身を焼かれながらも、幸希は一度ベッドの上で立ちあがり、母の隣へと座
り直した。無造作に床に脱ぎ捨てられているズボンとパンツを穿きたいところだが、
その行動に走ることにすら恥ずかしい。そのため、パンティを背中側に隠し、両手をペ
ニスの前で重ね合わせた、これまた恥ずかしい体勢で母の横顔を窺った。

「あの、ママ、本当に、ごめんなさい」

「ううん、いいのよ。ママこそ、ごめんなさいね。まさか、あんなコトしているとは、
思わなかったから」

万里子が、困惑を含みながらも優しい笑顔を向け、小さく頷いてくれた。それによ
って、幸希の心が少しだけ軽くなった。

「でも、ビックリしちゃった。まさか、ママの下着を持ち出していただなんて。いつ
からなの？　いつから、ママの下着を」

「一週間くらい前から。ママとのエッチ、本当にすっごく気持ちよかったから、また
したいって思ってた、でも、そんなことできないっていうのも分かって、だから、
せめてママのパンティに……。本当にごめんなさい」

母の問いかけに、恥ずかしさと申し訳なきを感じながら、正直に告白していく。

「そうだったの。でも、あのことは忘れなきやダメよ。前にも言ったでしょう」

「でも、忘れられないよ。だってママ、凄く素敵だったもん。僕が悪いんだって分かっているけど、そんな簡単に忘れるなんて、できないよ。僕、本当にママのことが」

「ダメ！ それ以上はダメよ、幸ちゃん。気持ち嬉しいけど、でも……。だからね、ママ、少しだけお手伝いをしてあげようと思うの」

幸希が改めて美母へ思いの丈をぶつけようとした矢先、万里子が強い調子で制止してきた。それと同時に、思いがけない提案を持ちかけてきたのだ。

「お手伝いって？」

「それは、その……。幸ちゃんのオチンチンを、ママが手で、その……」

「えっ！ それって、あの、ママが僕の握って、それで、出してくれるってこと？」

「え、ええ。この前みたいなのは、絶対にあってはならないし。それに、幸ちゃんも来年は受験生。だから、余計な気持ちに惑わされずに、お勉強して欲しいのよ」

（まさか、ママがそんなことを……。ゴクッ）

まったく考えたこともない、夢のような申し出であった。

にわかには信じられない言葉に、幸希はまじまじと母の顔を見つめてしまった。

（そりゃあ、ママとのエッチなんて、できるとは思ってたし、あんな強引なことをする気もないけど。本当にママが僕のをなんて……）

「あ、あの、それって、毎日してくれるの？」

「幸ちゃんが望むのなら、毎日でもいいわ。幸ちゃんに彼女ができるまでは、ママが幸ちゃんのエッチな気持ちを、落ち着かせてあげる。でも、分かっている？ この前みたいなのはなしだし、ちゃんとお勉強も頑張らないといけないのよ」

「分かっている。ママが毎日してくれるなら、僕、勉強いままでも以上に頑張るよ、だから、だから……ああ、ママ……」

万里子の言葉に、幸希の呼吸が乱れ、声が上がってしまった。しかし、先ほどまでの羞恥からくるものとは違い、興奮を伴う喜びからの上ずりである。

その証拠に、頭を垂れていたペニスがピクツと震え、一気に鎌首をもたげてしまった。淫茎を覆い隠していた左手甲を、張り詰めた亀頭が撫であげていく。瞬く間に完全勃起した強張り、その先端が顔を覗かせてしまう。

「キャッ、幸ちゃんったら、もうそんなに硬く……コクリ。さ、早速、してみる？」

「う、うん、お願い、ママ」

大きく頷いた幸希は、母の隣から勢いよく立ちあがった。恥ずかしさはもちろんあ

るが、それを上回る興奮が、ペニスを覆う両手を脇にどかせた。裏筋を見せそそり立つ硬直が、再び万里子の前に晒されていく。

「す、凄い……。ほんとに、コクツ、幸ちゃんの、とつても、大きいわ」

息子の強張りに頬を赤らめた万里子が、かすれた声をあげ、ベッドの縁から腰を浮かせた。美母はそのまま、幸希の正面にまわりこんできた。

ふつくら肉厚の朱唇がかすかに開き、喘ぐように呼吸が漏れているのが分かる。その姿態に、性感がますます刺激され、強張りに断続的な胸震いが起こった。

（本当にママが、僕のをまた……。それも今日からは毎日、触ってくれるんだ。気持ちのいいオマ○コに挿れさせてもらえないのは残念だけど、それは仕方のないことだし、綺麗なママに触ってもらえるだけでも、夢みたいな話だよな）

だが同時に、ある懸念が突如、幸希の頭に浮かんできた。

「ママ、あの、と、義父さんは、大丈夫かな？」

「えっ？ ああ、大丈夫だと思うわ。ママがお部屋を出るときは、斬かいて寝てたしでも、明日からはパパが帰ってくる前にしてあげるつてことで、いいかしら？」

「もちろんだよ。僕も、心置きなく、ママに気持ちよくして欲しいもん」

幸希が抱いた懸念は、義父であった。目が覚め、トイレのため二階におりてきたと

き、母子の禁断の行為を見られてしまう危険が脳裏をよぎったのだ。そのため、今後は義父が帰宅する前に自慰の手伝いをするという提案は、ありがたいものだった。

「まあ、幸ちゃんつたら。うふふつ、じゃあ、触るわよ」

万里子自身、多少は落ち着きが戻ってきているのか、母性的な笑みを浮かべると、右手をのびし、裏筋を見せる肉竿の中央をやんわりと握りこんできた。

「んはっ、あう、ああ、ママああ……」

少しヒンヤリとした細指で熱く漲る太幹を掴まれた瞬間、幸希の脳天に鋭い愉悦が突き抜けた。総身が震え、ペニスが大きく跳ねあがる。同時に、鈴口が開き、ネットリとした先走りがピュッと迸ってしまった。

「あんッ、熱いわ。それにとつても硬い。すぐに、楽にしてあげるから、もうちよつと我慢してね」

正面に立つ万里子の顔が、艶っぽく色づく。母性的でありながらも涼やかな目元がほんのりと赤らみ、ふつくらとした朱唇からは、甘い吐息が漏れ出していた。

潤みを帯びた瞳で幸希を見つめ、強張りを握る右手を優しく上下させる。チュツ、クチュツ、充分に溢れ出していた先走りにより、粘ついた淫音がすぐさま起こった。

「くはッ、ああ、気持ちいい。自分で触るのは、比べものには、ならないよう」

「いいのよ、出して。これからは毎日、ママが幸ちゃんのオチンチン、こうやってこすってあげるから。だから、遠慮しないで、スッキリしてちょうだい」

「ママあ、はあ、ママああ……」

美母がペニスをこすりあげるたびに、痺れるような快感が全身を駆け巡った。

切なさに腰がくねり、胴震いがその間隔を短くしていく。

（はあ、ほんとにもう出ちやいそうだ。せつかくママが触ってくれているのに、こんな簡単になんて……）

毎日してくれると約束してもらったとはいえ、これが記念すべき第一回目なのだ。少しでも長く、万里子のしなやかな指の感触を楽しんでいたい。

（それに、できれば僕もママの身体を……）

迫りあがる快感に顔を歪め、幸希は母の身体にウツトリとした視線を送った。万里子は前ボタン式のピンクのパジャマを着ていたのだが、その胸元が誇らしげに盛りあがっていたのだ。

美母が優しく右手を動かすたびに、パジャマの内側に隠された豊乳が連動し、ユサユサと揺れ動いているのが分かる。指が沈みこむ、蕩けるような柔らかさと、奥からほのかな主張をしてくる弾力、得も言われぬ感触が手の平に甦ってきてしまう。

「うんっ、出して、幸ちゃん。ママのお手々に、いっぱい出してくれないのよ」
ヂュチュツ、クヂュツ、なめらかな万里子の指が肉竿を扱くたびに、卑猥な摩擦音が大きくなり、ツンと鼻の奥を刺激する牡臭も濃くなっていった。

睾丸が迫りあがり、根本をノックしはじめる。太幹にはさらなる血液が注ぎこまれ、膨張のあまり赤黒くなった亀頭が、ググツとさらに笠を広げていく。

「ああ、ママ……。くうう、マッ、マあ……」

奥歯を噛み締め必死に射精衝動と闘っていた幸希は、身体の脇に垂れた右手を持ちあげ、万里子の左乳房をムンズと驚掴んだ。

パジャマの下にブラジャーは着けていない母の、ありあまる乳肉の感触が、手の平いっぱい広がっていく。

「キヤツ、こ、幸ちゃん、ダメよ。あんツ、オッパイ揉んじゃ、ダメえ……」

「ぐほッ、ああ、そんな強く、ギユツてされたら僕、出ちゃうよう。はあ、いいでしょう、オッパイ。くうう、気持ちいいよ。ママの大きなオッパイ、とつても柔らかくつて、はあ、ねえ、お願い。ママのオッパイ、ナマでいっぱい触らせて」

豊乳を揉みこんだ瞬間、万里子の総身がビクツと震え、ペニスを握る右手に力がこめられた。突然の強い握りこみに目を剥きつつ、幸希は手の平いっぱい感じられる

熟乳に陶然となった。

「あんツ、幸ちゃんつたら。オッパイだけよ。ほかの場所は、ダメ、分かった？」

「うん、ありがとう、ママ」

悩ましく眉間に皺を寄せ、許しを与えてくれた万里子に、幸希は満面の笑みで頷き返すと、両手を母のパジャマボタンへとのばした。ひとつ、またひとつとボタンに手をかけ三つ目を外したとき、深い谷間を刻む双乳が、弾むように姿をあらわした。

「ああ、ママのオッパイだ。ゴクツ」

残り二つのボタンも外し、幸希の鼻息が一気に荒くなる。両手を今度はパジャマの襟近くの合わせ目に移動させ、貼りついた薄紙を剥がすような繊細さで、万里子の華奢な肩を露出させた。

「もう、しようのない子ね」

若干の戸惑いを滲ませた熟母は、それでもいったんペニスから右手を離し、腕をすべりおろるパジャマを、そのまま床へストンと脱ぎ落としてくれた。

「はあ、すつごい。これがママのナマのオッパイ……。とつても大きくつて、素敵だ」
(本当に凄い。海ではビキニ、着けたままだったし、こんなに大きくつて綺麗だったなんて……)

黒ビキニに包まれていた双乳を上まわる迫力に、背筋が震えた。

釣り鐘状に実った豊乳は、三十七歳という年齢を感じさせない張りに満ちていた。下弦の丸みも美しいラインを描き、加齢からくる垂れとは無縁な印象だ。直径四センチほどの乳暈は濃いピンク、その中心に鎮座する乳首はくすんだピンク色をしている。「もう、そんなジロジロ見ないで、恥ずかしいじゃない。若い頃に比べたら、張りも失ってきてるし、こんなおばさんオッパイが欲しかったの？」

「うん、欲しかった。僕、ママのオッパイ、いっぱい触りたいってあの日以来、ずっと思ってたんだ。だから、すぐごく嬉しい。それに、ママのオッパイ、全然おばさんオッパイなんかじゃないよ。とっても素敵なんだから」

自嘲気味の万里子の言葉を強く否定し、幸希は両手をたわわな肉房へとのばしていった。指先が緊張のためか、小刻みに震えている。小さく喉を鳴らし、熟した柔乳にそっと手の平を重ね合わせていく。

ずにゆっ、熟乳の温かさと柔らかさが両手全体に伝わってくる。少し指先を押しこむだけで、柔らかな乳肉に沈みこんでいく感触がたまらない。極上の軟乳に、手の平全体が蕩けてしまいそうだ。

「うんっ、はぁん、幸ちゃん……」

「ああ、ママの大きくて柔らかいオツパイ、気持ちいい」

「いいわ、自由に揉んでちょうだい。こっちはママがちゃんと」

万里子の双乳を楽しむように、円を描いて膨らみを捏ねはじめた途端、再び母の右手がペニスを掴んだ。なめらかな指先が肉鏢に絡まり、優しく上下にこすりあげる。

「ぐふおッ、あう、あつ、ああ……」

「あんッ、凄いわ。幸ちゃんのオチンチン、ママの手を弾き飛ばしちゃいそうな勢いで、ピクピクしてる。気持ちいいのね。ママがこうしてあげると、気持ちいいのね」

「くッ、うん、最高だよ。大好きなママに硬くなったのを扱ってもらえるなんて、ほんと夢みたいだ。それに、こうして素敵なオツパイだって、触らせてもらえるし」

グチュツ、クヂュツ、溢れ出した先走りが万里子の指を濡らし、淫猥な摩擦音が高まる。熱い強張りを甘くこすられるたびに、脳天には痺れる愉悅が襲い、眼窩に鮮やかな火花が瞬く。睾丸が再び根本に迫りあがり、沸騰したマグマが発射の瞬間に備えてとぐろを巻いていた。

「いいのよ、出しなさい。幸ちゃんを気持ちよくしてあげるために、こすってあげるんだから」

「うん、でも、もつと、もつとママのこと、感じていたいよう」

奥菌をグツと噛み締め、こみあげる射精衝動をなんとかやりすごしていく。

指が沈みこむ肉房からいったん右手を離し、幸希は膨らみの中心に鎮座している、くすんだピンク色の乳首を、親指と人差し指で挟みこんだ。中に一本芯が通っているような、コリッとした感触が指の腹に伝わってくる。

「あんツ、ダメよ、幸ちゃん。そ、そこをそんなふうには悪戯したら、はあんツ、ママ、うっ、ううん……」

「あうツ、ママ、ダメ、そんなギユツて、思いきりこすられたら、僕、ぼくう……」
硬化した乳首を摘んだ瞬間、万里子の全身が切なそうにくねった。同時にペニスを握る右手にますます力が加わり、それまでになく高速で肉竿が扱きあげられた。

それまでは竿中心であった刺激が、動きが速まったことにより、右手人差し指と親指が亀頭の段差を乗り越え、亀頭裏の窪みをちようど人差し指の先でこすりあげられる格好となった。

「んはう、ぐふう、あつ、ああ、マツ、ママああ……」

強張りが激しく跳ねあがり、膨張していた亀頭がさらに漲りを強めた。あまりに強烈な快感に、眼前が白く塗り替えられそうになり、腰骨が切なそうに大きくくねる。

「出そうなのね、いいのよ、出しなさい。さあ、我慢しないで、幸ちゃん」

「うっ、ううう、お願い、ママ。最後は、ママのオッパイで、挟ん、でえッ……」
悦楽に歪む顔で必死に射精感と闘う幸希の口から、思わずそんな願望がこぼれた。

「えっ!? オっ、オッパイで?」

「うん。最後は僕、ママのオッパイに包まれて、出したいんだ。ねッ、いいでしょう」
「ああん、本当にしようがないわね。でも、ママがしてあげられる、それが最大のことですからね」

「うん、ありがとう、ママ!」

ペニスを握りはじめたときに比べ、艶っぽさの増した顔で承諾してくれた万里子は、すぐに強張りから手を離れた。悩ましく赤らんだ目元で見つめられ、幸希もすぐにたわわな肉房から両手を離す。すると、すぐに熟母は息子の正面に膝立ちとなった。

釣り鐘状の双乳が、ユッサユッサと揺れ動き、そのたゆたいを見つめているだけで、淫茎が小さく震えてしまう。

(頑張って耐えてよかった。本当に、ママのオッパイに挟んでもらえるなんて)

「いい? 挟むわよ」

「うん、お願いします」

潤んだ瞳で見上げてくる万里子に、頷き返した直後、母が自らの乳房の側面に両手

を這わせ、にじり寄ってきた。

グニユツ、次の瞬間、なめらかで柔らかな乳肌の谷間に、先走りで卑猥な光沢を放つペニス包みこまれた。

「んはっ、あう、あッ、ああ、マッ、ママあ……。くうう、すつごい、ママの柔らかいオッパイに、ほんとに僕のが、くッ、挟みこまれてるう」

「あんッ、熱いわ。幸ちゃんのオチンチン、本当に硬くて、ママのオッパイが溶かされちゃいそうに熱いわよ」

熱を帯びたように蕩けた瞳で、万里子が甘く囁きかけてきた。海水浴場で強引に母を犯してしまったときには、決して見ることができなかつた、艶めき匂い立つおんなの表情に、幸希の脳がクラッと揺らされる。

（ママがこんなにエッチな顔をするなんて……。ゴクッ。ああ、オッパイじゃなくオマ〇コに包まれて、このエッチな顔見ることができたらどんなにか……。）

ピクンッとペニスが胴震いを起こし、肉鏢をすつぽりと包みこむ柔らかな乳肉を、少しだけ押し返してしまう。

「はあん、出ちゃいそうなのね。待ってね、いまオッパイでこすつてあげるから」
ふつくと肉厚の朱唇から甘い吐息を漏らし、熟母が豊乳の側面に這わせた両手で、



谷間に向かつてギュッと乳圧を加えてきた。ムニユツ、モニユツ、熟れた乳肉でペニスが優しく捏ねまわされる。

「ンああ、ママ、くツ、すつごいよ。ママのオツパイでスリスリされるのが、こんなに気持ちいいなんて、ああ、僕、ほんとにすぐに、出ちゃいそうだ」

漏れ出した先走りくらいしか潤滑油になるものがないだけに、摩擦熱も確かに感じるのだが、それ以上の快感が幸希の全身を包みこんでいた。

「いいのよ、出して。幸ちゃんが悦んでくれるなら、ママ、これからもオツパイでしてあげるから、だから、我慢しないで、白いのいっぱいピュッピュして」

「おおお、ママ、ほ、本当だね。ほんとに、ぐツ、これからも僕のをオツパイで」

「ええ、約束するわ。幸ちゃんに恋人ができるまで、責任を持ってママが、気持ちよくしてあげる」

悩ましく潤んだ瞳で見つめたまま、万里子が頷き返してくれた。

色つぼく紅潮した顔で見上げたまま、熟母がゆつくりと上半身を上下させはじめた。柔らかな乳肉で強張りを捏ねる動きに、上下動が追加される。

チュツ、グヂュツ、大量に漏れ出た先走りが乳肌とこすれ合い、かすかに粘音を発生させた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>